

# 魂魄妖夢と二振の刀

深澄麟

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

魂魄妖夢の大切な二振の刀【白楼剣】と【楼観剣】が”付喪神”になっちゃった!? 魂魄妖夢と二振の刀を中心とした日常系コメディ（のはず…）です。

###注意###

この作品は

1. 小説ど素人の駄文
2. 東方未プレイのにわか
3. オリキャラ
4. 原作崩壊
5. 妄想設定
6. キャラ崩壊
7. 不定期更新

などが含まれています。他にも至らない点など、多々あると思います。それでもいいという方はぜひ暖かい目で見てください。

誤字脱字やアドバイス等々は随時受け付け、改善できるように努力します。よろしく願います。

# 目次

第一話 『邂逅』	1
第二話 『命名』	6
第三話 『失態』	10
第四話 『災難』	15
第五話 『敗北…そして決意』	19

## 第一話『邂逅』

私、魂魄妖夢は茫然としていた。理由は単純、目の前で見覚えのない自分と同じくらい歳の年齢に見える少女が三つ指をつけて頭を垂れているからである。

妖夢「どうしてこうなったんでしょか…」

そう呟くと私は記憶を昨日まで遡った。

くく昨日の朝くく

幽々子「今日は確か博麗神社で宴会だったわねく。」

妖夢「はい。夕方頃からです。」

博麗神社では、定期的に宴会が開かれているのである。

幽々子「それじゃ、準備頼んだわよく。」

妖夢「はい。わかりました。」

そう言うとは私は宴会の準備を始めた。

くく準備中くく

私は宴会の準備が終わると、幽々子様と私は白玉楼(私たちの家)を出た。

く移動中く

博麗神社に着くとそこはもうすでに酒乱騒ぎになっていた。

妖夢「相変わらずすごいですね。」

幽々子「賑やかだねく。」

私達はたまたま空いていた桜の樹の下に陣取り、花見を始めた。そう、今の季節は春である。それも桜が満開の春真っ盛りだ。

妖夢「綺麗ですね。」

幽々子「冥界の桜もいいけれどこっちの桜もいいわねえ。」

私達は冥界の住人だ。私は半人半霊という種族で幽々子様は亡霊である。冥界の白玉楼というところで死んだ魂達の管理を任されている。

するとそこへ金髪で、いかにも「魔女」と言った白と黒の服装の少女がやって来た。名を霧雨魔理沙という。「魔法の森」というところに住んでいる魔法使いで人間の少女だ。

魔理沙「幽々子様！妖夢く！」

妖夢「魔理沙さんですか。って、もう飲んでるじゃないですか。」

幽々子「早いわね。」

魔理沙「いや、まだまだ飲むぞー！せっかくだからな。」

魔理沙はそう言うのとニカツと笑った。するとそこに、紅白の巫女服を着た黒髪の少女が現れた。名を博麗霊夢という。この博麗神社の巫女である。

霊夢「幽々子と妖夢じゃない。ちゃんと何か持って来たんでしょねえ？」

幽々子「もちろん。妖夢。」

妖夢「はい、酒瓶を数本と食材を少々。後で台所借りますね。」

霊夢「ならいいわ。料理よろしくね。」

魔理沙「頼んだぞー」

そう言うのと二人は何処かへ行ってしまった。

??「お邪魔するわよー」

そう言いながら「スキマ」と呼ばれるものから顔を出したのは紫様だ。本名は八雲紫。この「幻想郷」の管理者で「妖怪の賢者」と呼ばれている。金の長髪に紫のドレス、日傘を持っている。

因みに幽々子様とは昔からの親友であるらしい。

幽々子「邪魔だと思うのだったら出て行って。」

紫「つれないわねえ。」

幽々子「妖夢く、お酒と食べる物用意して。」

妖夢「かしこまりました。それと幽々子様。これが終わったら私は料理の手伝いに行つて来ます。」

幽々子「わかったわ。頑張つてね。」

私は幽々子様と紫様のお酒とおつまみを用意した後、台所に向かった。

??「あら、来たのね。」

そこには銀髪でメイド服を着た割と長身の少女が料理をしていた。名を十六夜咲夜という。霧の湖と呼ばれる湖の辺りにある”紅魔館”と呼ばれる真つ紅な建物でメイド長として吸血鬼に仕えている。

妖夢「遅れてすみません。食材を持って来たのでここに置いておきますね。」

咲夜「わかったわ。悪いのだけれど、少しお嬢様の所に行ってくるから任せていいかしら？」

妖夢「はい。任せてください。」

咲夜「悪いわね。」

そう言うと咲夜さんは台所から出て行ったが、暫く料理を作っていると咲夜さんも戻ってきて料理を作るのに加わった。

”異変”を起こすまでは咲夜さんとは会ったこともなかったが、起こした後はこのような宴会の時によく会うため、それなりには仲が良かった。

暫くして料理も終わり、咲夜さんが主の所へ戻ったので私も料理を持って幽々子様の所へ戻る。するとそこには、茶髪で小柄な少女が増えていた。名を伊吹萃香という。手足に角錐や球体を鎖で繋げているという奇妙な格好をしているが、それより目立つのは頭に生えた少し捻れた二本の角である。彼女は世にも有名な種族、『鬼』である。なのでその小柄な体からは想像も出来ないような力を持っていたりする。それは妖怪の中でもトップレベルだ。幽々子様とはあまり一緒にいることはないが、紫様とは旧知の仲らしい。

妖夢「お待ちせしました。」

萃香「おお！飯が来た！」

幽々子「妖夢。ご苦労様。」

紫「美味しそうね。」

私も料理を置くと宴会に混ざった。と言っても、私はあまりお酒に強くないので代わりにお茶を飲んでいた。

その後は、人形師や吸血鬼、蓬莱人など様々な来客があったので、世間話などをして楽しんでいたのだが、萃香様が話に飽きたのか、私にお酒を飲ませてきた。私もただのお酒なら一、二杯は大丈夫なのだが、なんせ大酒豪と言われる鬼のお酒だ。すぐに酔いが回ってしまった。

私の記憶はここで途絶えている。

くく現在くく

妖夢（ということはここは博麗神社か。霊夢さんに悪いことをしてしまった。今度の休みにお詫びがてらお菓子を持ってこよう。って、今はそうじゃなかった。）

妖夢「え、ええと…貴女は誰ですか？」

??「ええ!?ひどいじゃないですか…いつも一緒にいたのに。」

妖夢「え?いつも一緒に?すみませんが見覚えが無いのですが…」

??「はあ…では、私のことをよく観察してみてください。貴女ならわかるはず。いや、わかってもらわないと困ります!!」

そう言われたので観察してみる。髪は銀のショートヘア、眼は少し緑がかった黒で少し鋭い。顔は小さく、全体的に凛々しい印象を受けるが、同時に何処か幼くも感じる。背は私より少し小さめで、服装は和服を動きやすくしたような感じで深い緑に桜の花弁があしらってある。と、このような感じだが、やはりわからない。

妖夢「すみません。やはりわからないのですが…何処か出会いましたか？」

??「はあああ…。いいですか?もう一度!よく!見てみてください。これがラストチャンスですよ。」

まだそう言うので、じつじつくり頭の頂点から足の先まで見てみたがどうしても思い当たることはなかった。

??「はああああ…。それだからいつまでたっても半人前と言われるんですよ…。しょうがないですね。」

少女は呆れながら一言言い放った。

?? 「私は白楼剣であり、楼観剣ですよ!!ご主人!!」  
妖夢「… ええええええ!!!」



## 第二話 『命名』

妖夢「ええええええ!!!」

妖夢は傍から見ていたらわざとなのではないかと疑いたくなるような勢いで驚いた。

もつとも、この少女は自分を妖夢が使っていた二振の刀だと言うのだからまだ当り前の反応の範疇ではあるだろう…。多分。言われてみれば妖夢が何時も身につけていた刀が見当たらない。

妖夢（刀が見当たらないと言う事は、まさか本当に?）

いや、待てよと妖夢は少し冷静になってみた。確かに物に命が宿るといふ事は幻想郷ではたまにある。代表的な例で言えば付喪神などがそうだ。付喪神は長く大切にされた道具やそうでなかった道具に魂が宿ったもののことを言う。その中には人の形をとり、一種の妖怪ようになる者達がいる。この少女もその可能性はあることにはある。しかし、いくら大切にしていたからといって自分の刀が付喪神化したとは信じられなかった。よって、他の可能性を考えてみた。

まず、盗まれた可能性だ。あの二振はそもそもが相当な業物である上に、片方は妖怪が鍛えた妖刀でもう片方は迷いを断ち切るという大変珍しい刀だ。扱いや手入れが難しいとは言えどひとつによつては盗む価値のあるものに十分なり得る。

しかし、ここで妖夢はふと思った。ではなぜこの少女はこんな真似をしているのかと。もしこの少女が犯行グループならばこんなことをするはずが無い。かと言って無関係の者ならさっきのような事を口走る意味がわからない。

??「おーい、ご主人ー?聞いてますか?」

少女が何かを話していたらしいが考え込んでいて全く聞いていなかった。

妖夢「あつ、すみません。考え事をしていて聞いてませんでした。」

??「はあ…。誰か来てますよ。」

妖夢「?」

振り返ってみれば、丁度誰かが入ってくるころだった。

?? 「五月蠅いわね。何よ、大声出して。」

そう言いながら部屋へ入ってきたのは霊夢だった。

妖夢 「あつ、霊夢さん！すみません。昨日から迷惑掛けてしまつて。」

霊夢 「ほんとよ、全くめんどくさい…つてそいつ誰？」

妖夢 「それが…」

↳少女説明中↳

という訳なんですよ。」

霊夢 「で、ホントかどうか分からないから困っていたと。」

妖夢 「はい。」

すると、それまで黙っていた少女が呆れ顔で口を開いた。

?? 「はあ…。わかりました。そんなに信じられないなら証明しましょう。」

妖夢・霊夢 「??…!!」

そう言うと少女は目を閉じた。しかし、すぐに少女の身体を光が包んだ。光は淡い桜色をしていて、妖夢はつい見とれてしまった。

少しすると光が収まり、そこには二振の刀があった。妖夢は驚いたが、慎重に刀に近付くと手に取り、それが自分の愛刀である事を確認した。

?? (ね、言ったでしょう?)

妖夢・霊夢 「!!」

突然、どこから声が聞こえてきたのを二人は感じた。先程の少女の声だった。しかし二人の脳内に直接響いてきているようで、声の出どころが掴めない。

?? (こっちですよ！二人とも鈍すぎませんか?)

二人はイラツとしつつも不思議と声が刀から聞こえてきたように感じて刀を見た。

妖夢 「えっ、まさか本当に？」

霊夢 「みたいね。」

?? (はあ…。やっとですか。やっと信じてくれましたか。もう、長いですよお二人さん。)

こうなつては現実を受け入れるしか無かった。この刀がさっきの少女なのだ。

妖夢「付喪神つて元の姿に戻れるものなんですか？」

霊夢「知らないわよ。」

?? (結構簡単でしたよ?)

その後の会話で二週間程前から自我が芽生えつつあったこと、それより前のことは記憶としてあることなどが分かった。ちなみにもう人型に戻っている。

妖夢「そういえば、貴女のことなんて呼べばいいんでしょうか?と  
いうより貴女としての名前つてあるんですか?」

霊夢「言われてみれば。その所どうなの?」

??「私には白楼剣と楼観剣の名しかありませんが…。」

霊夢「じゃあ、考えてもらえばいいじゃない。妖夢に。」

妖夢「わ、私ですか!」

霊夢「あんた以外に誰がいるつていうのよ。」

妖夢「え、えーと…幽々子様とか…?」

妖夢がそう言うと、少女は妖夢の方へ向き直り、妖夢の目をしっかりと見て言った。

??「ご主人。私の主人はご主人です。ですからご主人に決めてもらうのが筋かと。」

妖夢「まあ、そうと言えばそうだけど…。」

妖夢は悩んだ。確かに少女のいうことは正しい。しかし、妖夢はひとの名前なんて考えた事は当然無いし、ひとが一生名乗る大切なものを自分が決める自信もない。それに、自分には主人がいる。その主人を差し置いてそんな事をしてしまつてはいけない気がした。

妖夢「やはり、ここは幽々様の名付けたほうが…」

霊夢「もう、じれつたいわね。堅苦しいのよ。さつさと名前くらい考えなさい。」

??「もし幽々様のごことが気にかかるなら仮の名前という事にしてはどうでしょう?」

妖夢「ま、まあ、それなら…」

霊夢からの後押脅しもあり、妖夢は仮の名前を考えることにしたが、いいものが思いつかない。

妖夢 「どんな名前がいいんでしょうか？」

?? 「出来ればかつこいい系がいいですけど、いい名前なら大丈夫ですよ。」

妖夢 「うくん…かつこいい名前…」

霊夢 「剣の名前とかもじってみたら？」

妖夢 「うくん…!!」

霊夢 「何か思いついた？」

妖夢 「はい、思いつきました。…では、恐縮ながらこの魂魄妖夢、命名させていただきます。あなたの名前は…」

『白楼 神奈』です。」

### 第三話 『失態』

妖夢 「あなたの名前は…『白楼神奈』です。」

少女は頭を垂れ微動だにせずにはいたが、しばらくすると顔をあげて口を開いた。

神奈 「…ありがとうございます。今後『白楼神奈』を名乗らせていただきます。」

妖夢 「良かった。変な名前とか言われたらどうしようかと…」

妖夢は緊張して返答を待っていたが、特に何も言われなかったのを取り敢えず安心した。

霊夢 「意外に良いじゃない。安易だけど。」

妖夢 「そ、そこは…大目に見ていただけると…」

神奈 「安易なのは少し思う所もありますけど、それを差し引いてもいい名前だと思います。気に入りました。」

妖夢 「なら、良かったです。」

霊夢 「名前も決めたことだし、次は能力ね。何かあったりする？」

神奈 「いや、自分では何もわかりませんけども…」

幻想郷の人外は能力を持っていることが多い。ものによっては危険な能力もあるため霊夢は聞いたのである。

妖夢 「何かありませんか？能力判定札的なもの。」

霊夢 「見た事はないわ。うーん、どうすれば…あつ、そうだ！」

神奈 「何か思いつきましたか？」

霊夢 「紫なら、何か知ってるかもと思ったのよ。」

妖夢 「紫様ですか…確かに何かしら知ってそうですね。」

神奈 「紫様というと、あの金髪紫のドレスに傘の方ですよね？」

妖夢 「なんで知って…って、そうだ。記憶はあったんでしたね。」

霊夢 「うーん、やっぱりわかんないわね。仕方ない。”あれ”をやるしかないか…」

霊夢は面倒そうな顔をしながら言った。

神奈 「どうしたんですか？」

霊夢 「いや、あいつっていつどこに居るのかわかんないのよね。」

妖夢「確かに。どうする気なんですか？」

霊夢「だから、呼び寄せようかと思つて。外に出るわよ。」

妖夢・神奈「?。」

少女移動中

妖夢「で、どうするんですか？」

霊夢「まあ、見ればわかるわ。」

妖夢・神奈「?。」

そう言うのと霊夢は、構えをとつて目を瞑り何かを始めた。二人が首を傾げていると、段々目の前の空間が歪み始めた。

妖夢・神奈「!!。」

すると突然、歪み始めた空間の横に線が一本走り、縦に割れた。二人がびっくりしていると、中から少し怒った様子の紫が出てきた。

紫「ちよつと、霊夢!!勝手に結界を緩めるのはやめてつて何度も言つてるでしょ!!幻想郷が崩壊したらどうするのよ!!」

そう、霊夢は結界を緩めたのだ。詳しい説明は省くが、幻想郷は2枚の特別な結界で覆われていてそれによつて外と隔離されているのだ。この結界が崩壊すると、幻想郷は外の世界のある山に出てきてしまい、妖怪たちは存在を否定されて消えてしまうのだ。幻想郷の管理者である紫は結界の緩んだところの修理もしているので気付いて飛んできたのだ。

霊夢「あ、来た。」

紫「『あ、来た。』じゃないわよ、まったく…で、要件は?。」

霊夢「あの子の能力を知りたいんだけど、何かない?。」

紫「ん?初めて見る顔だけど、誰かしら…?ああ、そういうことね。わかつたわ。」

紫は神奈を凝視していたがしばらくすると納得したような満足そうな顔をした後承諾した。

霊夢「話が早くて助かるわ。で、どうするの?。」

霊夢がそう言うのと紫は神奈に歩み寄り、優雅にお辞儀をした。

紫「改めて、八雲紫と申します。よろしくお願いしますわ。」

神奈は突然のことに狼狽えそうになったが、なんとかこらえて自己

紹介した。

神奈「先程ご主人から名前をいただきました。白楼神奈といいます。よろしくお願いします。」

神奈と紫は妖夢の方を向き、クスクスと笑った。

妖夢「ゆ、紫様？どうなさったんですか？」

紫「ふふふ、いや、あなたがご主人と呼ばれているのが可笑しくてつい、ね？」

紫がそう言うのと妖夢は顔を真っ赤にしてしまった。

妖夢「わ、笑わないでくださいよお!!」

紫「あんなに小さかった子が、もうご主人に…」

妖夢「うわああああ!!」

霊夢「フフフ、や、やめて、やりなさいよ、ふふ、アハハハ!!」

紫の弄りに真面目に反応する妖夢に霊夢もつい笑ってしまい、それを見た妖夢が涙目になってしまった。

〜少女謝罪中〜

紫「それで、能力だったわね。」

霊夢「そういえばそうだったわね。」

霊夢はすっかり忘れていたが、能力のことを聞くために紫は呼ばれたのである。

妖夢「本題忘れてるじゃないですか!!」

霊夢「だって、あれは、よ、妖夢が、フフフ」

紫「霊夢、もうよしなさい妖夢がまた、な、泣いちやうわよ、ふふふ」

妖夢「もうやめてください!!ほんとに!!」

せつかく落ち着いて来た妖夢はまた顔を真っ赤にして叫んだ。

紫「ふふふ、わかったわよ。で、能力のこと教えようと思ったんだけど…」

霊夢「思ったんだけど、何なのよ。」

紫はニコリとして言い放った。

紫「やめたわ。」

霊夢「は？ちよつとあんだ…」

霊夢の言葉を遮って紫は妖夢に向き直った。

紫「だって妖夢、あなたの師匠は修行のとき、何かを教えたかしら？。」

妖夢「!!」

妖夢は自らの剣の師である祖父、妖忌との修行を思い出した。

妖夢「：そうでしたね。確かにお師匠様は技は見て盗むものだと  
言っていました。」

霊夢「どういうこと？」

妖夢「つまり紫様は自分達で探し当ててみると仰るのですね？」

紫「わかっているじゃない。じゃあ、私はもう帰るわね。」

霊夢「ちよつと紫！妖夢もいいの？」

妖夢「はい。神奈もいいですよね？」

神奈「はい。ご主人がいいのなら。」

霊夢「はあ…。ちよつと気になるんだけど…仕方ない。で、この後  
どうするの？」

妖夢「あれ？今って何時くらいでしたっけ？」

霊夢「もうそろそろお昼の頃だけど。」

それを聞いた瞬間、妖夢は固まった。

霊夢「妖夢？どうしたの？」

神奈「ご主人？どうかしましたか？」

二人が尋ねた次の瞬間、

妖夢「幽々子様のご飯がー！ー!!というより白玉楼の食料庫  
がー！ー!!」

妖夢は大声で叫んだ。何を隠そうこの半人半霊、あろうことか自分  
の主のことをすっかり忘れていたのである。主の朝・昼食も。

そうすると何が起こるか。

幽々子は大食いだ。それもフードファイターが可愛く見えるレベ  
ルで、その胃袋たるや、どこぞのピンクの悪魔に並ぶとされる程であ  
る。

普段は「妖夢の作ったご飯が食べたい」と食料庫を漁ったりするこ  
とはないが妖夢が居ないうえに二食も抜かれるとなると話は別で、





## 第四話 『災難』

妖夢「幽々子様ー!」

妖夢は白玉楼に着くとすぐに、普段主がいる居間に飛び込んだ。しかし、そこに主の姿はない。妖夢はそれを確認するとすぐに駆け出した。

次に妖夢が飛び込んだのは、食料庫だった。

妖夢「ここですかっ!!…あれ? いない…?」

妖夢は、主がここで食料を漁っている姿を想像したが、予想と違い主の姿はなかった。

妖夢「はあ…良かった。取り敢えず食料は無事か。後は幽々子…さ…ま…」

しかし、その時妖夢の背に寒気が走った。気付けば、周囲がなんだか肌寒いうえ、どことなく不気味な気配を放っている。

妖夢「…ひっ!?!」

その時、何か冷たい物が妖夢の首筋を撫でた。妖夢は本格的に怖くなって、身体が動かなくなってしまった。すると、

トントン

妖夢「ひゃっ!?!」

何かが妖夢の肩を叩いた。妖夢が恐る恐る振り返ると…

幽々子「う〜ら〜め〜し〜やく!! って、あれ? 妖夢?」

妖夢は気絶していた。

く少女気絶中く

妖夢「はっ！ここは…って、幽々子様！」

幽々子「おはよう、妖夢。」

妖夢「幽々子様、私は何故寝ていたのでしょうか？どうも記憶がはつきりしなくて…」

妖夢は気絶のショックで、何も覚えていなかった。

幽々子（妖夢ちゃんをいじるとやっぱり楽しいわね。でも、冥界に住んでいるのに、どうしてこうも怖がりなのかしら？）

幽々子「わからないけど、貴女食料庫で倒れてたのよ。」

妖夢「！ 申し訳ありません。幽々子様に手間を掛けさせてしまつて…」

幽々子「いいのよ。それよりお腹が空いたわ。何か作つてちょうだい。」

妖夢「はい！今すぐに！」

そう言うと妖夢は台所に料理を作りに行った。途中食料庫に寄つた時に身体が震えたが、妖夢は首をかしげるばかりだった。

く少女料理中く

妖夢「幽々子様、おまたせしました。」

幽々子「やっぱり妖夢の料理は美味しそうね。それじゃあ、いただきます。」

幽々子のご飯を食べるのを待っていた妖夢は門を誰かが叩く音を聞いた。

妖夢「幽々子様。誰か来たようなので行ってきます。」

幽々子「行ってらっしゃい。」

そう言うと妖夢は門へ向かった。

く少女移動中く

妖夢は門に到着すると、警戒しながら門を開けた。自分から冥界に来る者など滅多にいないが、もしかすると悪意のあるものかもしれないからだ。

妖夢「どなたでしょ…うか…」

神奈「どなただと思いますか？ご主人。貴女が置いて行ったひとですよ。忘れて行ったひとですよ。ええ。」

妖夢は門を開けたことを後悔した。門の先には、修羅が立っていた。そして、何故神奈が修羅と化しているかの理由にも検討がついてしまった。

妖夢は腰を90度で曲げると全身全霊をもって言った。

妖夢「すみませんでしたアアア!!」

神奈「許すかアア!!」

妖夢は神奈に小一時間ほど説教を受け、もう二度と神奈を置いて行かないと心に誓ったのであった。

幽々子は食事をとうに終え、お茶を飲みながら妖夢を待っていた。

幽々子「それにしても、妖夢遅いわね。何かあったのかしら。」

すると、障子の戸が開き、妖夢が現れた。

妖夢「遅くなってしまって申し訳ありません。今片付けますね。」

幽々子「妖夢、随分遅かったけれど、何かあったの?」

妖夢「その事なんです、後で少しお話があるのですが、よろしいでしょうか?」

幽々子「(あら?少しだけ食料庫の物を食べたのがバレたのかしら

? ) いいわよ。」

妖夢「ありがとうございます。」

く少女片付け中く

幽々子「それで、話って何?」

妖夢「はい。それでは、入ってきてください。」

幽々子「?」

妖夢がそう言うと、障子を開け、神奈が入ってきた。

幽々子「あら、貴女は…」

神奈「この姿では初めましてですね。幽々子様。」

妖夢「えっ?幽々子様、誰か知ってるんですか?」

幽々子「誰かは知らないけれど、何者かはわかるわよ?もしかして、

妖夢はわからなかったの?」

神奈「そうなんですよ!ご主人つたらいつも一緒だったのに全くわからないと言うんですよ?ホントひどい主ですよね。」

幽々子「本当？妖夢、流石にそれはひどいわよ？自分に仕えてくれているのだから、『わからない』は可哀想でしょ？」

妖夢「え!?幽々子様本当にわかるんですか!?なんで!」

幽々子「この子の妖力をみれば一発じゃない。そんな調子じゃ妖忌には近付けないわよ？」

妖力は妖怪によって微妙に違った性質をしているので、大妖怪や訓練した者は妖力で個々を見分けることが出来るのだ。

妖夢「はあ…まだまだ、道のりは長いなあ…あつ！それですすね、彼女に”白楼神奈”という名前を付けたのですが、幽々子様にも何とも言わずに決めて良いことではないので、こうしてお話をさせてもらったのですが…」

幽々子「いい名前じゃない。本人はどうなの？」

神奈「私も承諾済みです。」

幽々子「なら、神奈で決定でいいでしょう。これからよろしくね。」

神奈「はい。では改めて、元白楼剣と楼観剣の白楼神奈と申します。

幽々子様、これからよろしくお願ひします。」

妖夢「幽々子様、神奈はどの部屋がいいでしょうか？」

幽々子「そうね。それも含めてこれからの話をしましょうか。」

白玉楼はこの日、新たな家族従者を迎えた。

## 第五話 『敗北…そして決意』

神奈が初めて白玉楼に来た日から3日。この間妖夢は神奈に白玉楼での仕事を教えたり、家事を教えたり、白玉楼の立場や幻想郷での習慣、スペルカードルールなど様々なことを教えた。神奈は刀だった頃の記憶があったことも手伝って数ある仕事をそつなくこなしてみせた。その有能ぶりも目を見張るものがあったが、それより妖夢が驚いたのは神奈の動きに無駄がなかったことだった。行動の端々に見える体の使い方、頭脳の使い方、所作など、どれひとつとっても優雅で、自然で、しかし無駄がない。妖夢は、そんな神奈の姿に尊敬の念を覚えると共に、自分のものにしようとしっかりと観察していた。

そんなこんなで今は昼過ぎ。午前中に掃除を終わらせ、昼食は先ほど食べ終え、夕食の下準備も終えたので妖夢は庭の手入れをしていた。

妖夢「一人でやっていた時は休む暇もなかったのに、二人だとこんなにも早く終わるんですね。助かりました。」

神奈「いえいえ。主を手伝うのは従者として当然のことですから。」  
そう答えた神奈は今、庭が見える部屋で自己流の座禅のようなものをしていた。本当は妖夢の手伝いをしようとしたが、妖夢が庭の手入れを半ば趣味のように捉えていること、単純に妖夢のほうが上手かった事などから庭の手入れは妖夢が、それ以外を二人で分担してやることになったのだ。したがって神奈は暇だったので、精神統一に加えて自分の能力を探るために座禅もどきをしていたのだ。ちなみに今、神奈は白衣と青い袴のようなものを着ている。これは神奈がやってきた日の次の日に人里の服屋で仕立ててもらったものだ。普段はこれを着ることにしたようだ。

するとそこに幽々子がやってきた。

幽々子「妖夢ちゃん。神奈ちゃん。ちよつといいかしら?」

妖夢「何でしょうか?」

幽々子「ちよつと気になったことがあって…」

妖夢「何かあったんですか?」

幽々子「いや、そうじゃなくてね、昨日紫と話してたのよ。神奈ちゃんって、どれぐらい強いのかって。だから一度妖夢と手合わせしてみたいなって思ったんだけど、今は暇かしら？」

神奈「私はいいですが…」

妖夢「私も大丈夫です。前から気になってたんですよね。」

幽々子「それじゃお願いね？」

妖夢・神奈「はい！」

少女準備中

妖夢「そういえば、神奈はもうスペルカードを作りましたか？」

神奈「あ、まだ作ってないですね。どうしましょう？」

幽々子「手合わせだから大丈夫じゃないかしら。木刀だし。」

妖夢「そうですね。勝利条件はどうしますか？」

神奈「木刀を落とすか、一撃を入れる又は急所の寸止めでもいいんじゃないですか？」

幽々子「じゃあそれで。準備はいいかしら？」

妖夢「はい。」

神奈「何時でも。」

今回はただの手合わせなので木刀を使い、簡単なルールでの対戦となった。二人は現在、互いに一本ずつ木刀を持って15mほど離れて構えている。

幽々子「それでは、はじめ!!」

ダン!!

妖夢は合図と共に神奈に向かって駆け出した。妖夢の瞬間的な速度は幻想郷最速と名高い烏天狗『射命丸文』ですら超えると言われている。全力ではないとはいえ、それでも数秒で間合いに踏み込んだ。そしてそこから上段からの切り下ろしを仕掛けた。が、

カン!!

それはいとも簡単に神奈に止められた。そこから神奈は木刀を上弾き、から空きの胴体に右上からの袈裟斬りを仕掛ける。妖夢はそ

れを後ろに跳んでよけた。

妖夢（簡単に防がれた。単純ではありましたが何より力で負けている。ビクともしなかった。正面からの打ち合いは危険ですね。ならば速さで…？）

着地と同時に前を向いたが神奈がいない。

神奈「考え事とは随分と悠長ですね。」

妖夢（まさかっ!?!）

妖夢が後ろを見ると神奈は既に振り下ろしの動作に入ろうとしていた。

妖夢（速い!! 間にあうか!?!）

なんとか木刀を滑りこませたが、勢いに押されて何歩かたたらを踏んでしまう。一撃の重さもさることながら、剣速が尋常じゃない。手が痺れる。そこをさらに追撃が襲う。

カン!カン!カン!

なんとか凌いではいるが、それ以外をさせてもらえない。

妖夢（このままじゃ…なんとかしないとそろそろ厳しい…）

妖夢「くっ!!…っ!!今だ!!」

ようやく隙を見つけ、バックステップで距離を取る。しかし、

神奈「まだまだですね。」

妖夢「!!」

気付けば神奈が後ろにいて、首に木刀が添えられていた。

幽々子「そこまで。神奈の勝ち。」

神奈「ありがとうございます。」

妖夢「…ありがとうございます。」

手合わせは神奈の勝ちで終わった。

く少女移動中く

場所を変えて居間に来た3人はお茶とお菓子を食べていた。

幽々子「それにしても強かったわね、神奈ちゃん。」

神奈「ありがとうございます。」



幽々子「妖夢ちゃんがあんなに押されたことあったかしら？」

妖夢「正直に言うとお師匠様より強かったように思えました。とは言っても悔しいですね…。」

神奈「それは当然ですよ。」

妖夢・幽々子「？」

神奈「私は今までの魂魄家の全ての剣豪と共に過ごしてきたんですよ。確かに前のご主人は強かったですけど、彼は歴代5く6番目ぐらいですよ。」

妖夢「お師匠様よりすごい人がそんなに!？」

幽々子「それだけでそこまで動けるものなのねえ。」

神奈「私ほど魂魄家の剣術を見てきた者はいませんからね。ひとりひとり振り方や癖があつて面白いですよ。」

そこまで聞くと妖夢は何かを決意する

妖夢「神奈、私に剣術を教えてください。お願いします。」

妖夢はこの頃伸び悩んでいた。素振りや型は稽古や自主練習でも度も練習してきたが、今まで対戦相手が師匠である妖忌しかいなかったため実戦経験があまりにも少なかったのだ。その上最近では霊夢をはじめとした幻想郷の住人たちに対してあまりいい結果を出せていない。春雪異変では咲夜に涼しい顔で負け、永夜異変では霊夢に解決を取られてしまった。そのような事があつたがために最近の妖夢はどこか焦っていたり、何か思い悩んだように素振りをすることが増えていた。簡単に言う広い世界を知り、自信を無くしてしまったのだった。

神奈「いいんですか？ご主人の師匠とは違うやり方になりますし、何より私はご主人の従者ですよ？」

妖夢「構いません。私にはまだ主としての自覚なんて出来てませんし、するつもりもありません。私にとって神奈は大切な相棒です。相棒から剣術を教えてもらうのに恥ずかしいことなんてありませんし、お師匠様の教えも大事ですが私は強くなりたいんです！」

神奈「相棒…ですか。嬉しいことを言ってくれますね。では、ひとつだけ聞かせてください。ご主人が強くなりたい理由はなんですか

？」

妖夢は数瞬考えると噛み締めるように言った。

妖夢「私は強くなつて…幽々子様を…大切な人たちを守りたい！お師匠様に頼らなくても、幽々子様に庇護されなくても、霊夢さん達の手を借りなくても、みんなをこの手で守れるようになりたい!!」

妖夢は思いの丈を全て吐き出した。妖夢は何も出来ない自分を悔いていた。力の及ばない自分を恨んだ。それでも折れなかった。いつか師匠に追いつけると信じ、追い越せと自分を叱咤してきた。全ては守るため。大切な人たちを。大切な笑顔を。

幽々子「妖夢ちゃん…こんなに大きくなっちゃって…」

神奈「…いいでしょう。それほど覚悟があるなら、ご主人はどこまでも強くなれます。様々な剣術を見てきた相棒のお墨付きです。信頼してくれていいですよ。」

妖夢「ありがとうございます!!これからよろしくお願いします!!」

神奈「…前から気になってたんですけど、ご主人私に対して堅過ぎじゃないですか?…って、私が言えたことでもありませんが。」

妖夢「いや、まだ自分の刀が付喪神になったっていう実感が無かったから、どうしても初対面の人みたいな感じがしてしまつて。あと、人の上に立つた事もなかったから。」

神奈「はあ…。まだまだ半人前ですね。」

妖夢「うっ!!す、すぐに認められるまでになつてやりますよ!!」

神奈「ふふふ♪楽しみにしておきますね。」

幽々子「頑張つてね。」

妖夢「!!…!!はい!!」

この日妖夢はまた一つ強くなった。